造形作品と展開
「ながれくる水のように（2022-09）」

浜谷　信彦

Art work “Like Flowing Water 2022-09” and its formative development

Nobuhiko HAMAYA

Abstract

This report is about the artwork "Like Flowing Water 2022-09" and its process of creation. I have been working on the theme of interactive creation with nature and its molding process. It is a sculpture made with ceramic materials and techniques. I tried to create a work through a collaborative process between nature and humans. This artwork was exhibited in the Artist Associations' Exhibitions “68^{th} Ichiyo Exhibition” at The National Art Center TOKYO in 2022 and “Ishikawa Ichiyo Exhibition” at Ishikawa Prefectural Museum of Art in 2022.

Keywords: Artwork 芸術作品，Nature 自然，Sculpture 彫刻，Ceramics Art 陶芸

［研究制作］

これまで、自然との対話的な造形をテーマにし、目には見えない重力などの自然の力や素材 の性質を作品制作のプロセスの中に取り入れてきた。

本レポートでは、造形作品「ながれくる水のように（2022-09）」と前作からの造形展開とプロセス、および展覧会での発表について報告する。自然の力や素材との対話から即興的に生まれてくるフォルム をもとに、自然と人為の共創的な造形プロセスを通して作品を制作した。

本作品の主題である「ながれくる水」を、遙かなる時を超えて、生命を活かす象徴的な存在として捉えており、しなやかに形態や状態を変えつつ、命の源からながれくるイメージを表現した。

この作品は、国立新美術館で 2022 年に開催された美術公募展第 68 回一陽展、および石川県立美術館で開催された一陽会石川支部 WEB 展覧会へ出品された。

図１　作品「ながれくる水のように（2022-09）」
浜谷信彦　2022 年制作
素材　陶　酸化焼成 1220℃
概寸　W90 ㎝×D 40 ㎝×H 30 ㎝

図２　作品（部分）

図３　作品（部分）

展開造形とプロセス

本作品と同様の主題「ながれくる水のように」で最初に制作した 2019 年第 65 回一陽展出品作「ながれくる水のように」(2019) ※（図４）では、天と地を流れるように垂直方向に造形している。その後、二つのタイプの造形展開を試みた。一つは壁面への展開、もう一つは水平方向への展開である。

先ず、壁面への展開では、作品が壁面に支持されるため計画性が必要となり、作品の正面や背面を意識してしまい人為的な造形になってしまう。本研究の人為と自然との対話的から生まれる造形というコンセプトからは逸れてしまうため、別の作品群として制作した。

もう一方、本研究作品「ながれくる水のように 2022-09」は、水平方向への造形展開である。粘土の自重による歪みを生じやすくするため、ロクロの上に予め僅かに傾けて板を設置した。その板台の上で、手びねりにより、厚さを 10mm 前後にして筒状に成形していく。

一定の高さまで積み上げると傾斜と土の自重の影響から歪みが生じてくる。その素材の可塑性や重力を常に感じ、意識しながら、倒れないようにバランスを取り補正をして、インタラクティブに即興的に成形していくことで、想定を超える有機的なフォルムが生まれてくる。

2019 年の制作※（図４）では同様にロクロ上の傾けた板の上で大まかなフォルムからディテールまで、垂直方向に制作し、台座の上に立て垂直方向に伸びていく作品として仕上げている。

しかし、今回の制作※（図１）では、水平方向に造形するため、大まかなフォルムまでは同様に垂直方向に成形した後、自重で作品に歪みが生じたり、崩れてしまわないように、ある程度まで乾燥させた。乾燥させすぎて可塑性が失われてしまうと、後のディテールの彫りが出来なくなるため注意が必要である。その後、ロクロ上の板から外して水平方向に置き、ディテールを彫り成形していった。

また、エスキースは一般的には制作をはじめる前に描かれることが多い。しかし、今回は大まかなフォルムが決まりロクロから外した段階で、初めてディテールを主としたエスキースを数枚描いた。これによりフォルム全体が人為的、計画的になり過ぎないためである。

つまり、本研究制作のプロセス前半では、傾斜や自重の影響を受けて、その背後にある自然を感じながらインタラクティブに即興的な造形をし、プロセス後半では、悟性によってデザイン的、意図的な造形を行った。全体的には、自然と人為のコラボレーションを採り入れた造形方法を試みた。

焼成については、先端に細長い形状の箇所があり強度を上げる必要がある。高温で焼成した場合には強度は増すが、歪みが出やすくなる。そのため強度と歪みのバランス、質感や風合いを考慮し、一般的なテラコッタ彫刻よりも高温である 1220℃無釉で酸化焼成し、最高温度に到達してから 30 分間温度を保持した。

図４「ながれくる水のように」(2019)
浜谷信彦　2019 年制作

展覧会出品
　本作品「ながれくる水のように（2022-09）」2022 年制作は、次の２つの展覧会にて発表された。

公募展第 **68** 回一陽展
　場所：国立新美術館
　所在：東京都港区六本木７−２２−２
　会期：2022 年 10 月 5 日（水）～17 日（月）

図５ 作品展示（国立新美術館展示室）

図６ 会場入口（国立新美術館）

　彫刻部 会員出品
　作家が作品を前にプレゼンテーションや質疑応答等を行うギャラリートークについては、
　新型コロナウィルス感染拡大防止対策のため、今回は自粛となった。

一陽会石川支部 **WEB** 展覧会
　場所：石川県立美術館
　所在：石川県金沢市出羽町２−１
　会期：2022 年 11 月 30 日（水）～12 月 4 日（日）
　WEB 動画公開

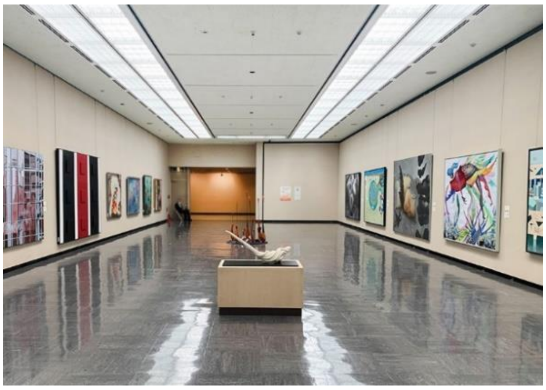

図７ 作品展示（石川県立美術館展示室）

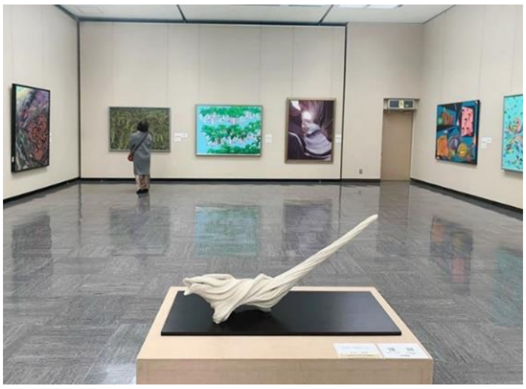

図８ 作品展示（石川県立美術館展示室）

　展覧会と連動して WEB 動画による作品制作の様子や作家紹介を行った。

〈出典〉

図４）浜谷信彦：「ながれくる水のように」（2019），浜谷信彦：「造形作品 流れくる水のように」活水女子大学，活水論文集第 63 集，pp.57-59（2020 年）